

## 論 文

# 幼稚園・保育所・こども園における記録と評価 —「子ども理解」を促す観察記録の取り方の指導をとおして—

櫻井京子

(西九州大学子ども学部子ども学科)

(平成30年12月 5 日受理)

## **Recording and Evaluation in Kindergartens, Nurseries, and Childcare Facilities: —A Study on Taking Observational Records to Promote Educators' understanding of Children—**

Kyoko SAKURAI

*(Department of Children's Studies)*

(Accepted December 5, 2018)

### **Abstract**

Since April 2018, laws and regulations on kindergartens, nurseries and childcare facilities have been revised and enacted simultaneously, constituting a major turning point for infant care and education in Japan. Childcare workers' expected roles and qualifications have diversified, leading to greater work responsibilities. Daily, childcare workers reflect on their own work to develop their expertise and improve the quality of childcare. After self-evaluation, they share their insights with fellow members of staff, striving to make improvements and link them into subsequent practice. To conduct an objective evaluation, it is necessary to take records. However, in modern society, many people, including students aspiring to be childcare workers, lack competence in writing and record taking. Therefore, the author has been executing initiatives on an ongoing basis to provide students experience in taking observational records as well as to foster an understanding of the importance of this prior to training. In this paper, I clarify the importance of records and evaluation at children's facilities on the ground. In addition, I report on and consider this effort in guidance, along with its outcomes.

Key words : Observational records 観察記録  
Practice records 実践記録  
Understanding children 子ども理解  
Childcare evaluation 保育の評価

## 1. はじめに

平成30年4月から、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」が同時改訂・施行された。「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」は10年ぶり、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」は3年ぶりの改訂であり、どの施設にあっても「質の高い幼児教育・保育をめざす」ことが明確に示されることになった。さらに、今回新たに「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」が示されており、小学校に送り出す側の保育者と受け入れる側の小学校教諭には、同じ方向に向かって子どもの育ちを共有し、より緊密な連携を図ることが求められているのである。

このように今、幼児教育は大きな転換期を迎えており、それに伴って保育に携わる保育者に期待されている役割やニーズは多様化し、課せられる責任も重大である。保育者は、日々の煩雑な保育業務の中で自らの保育について振り返りを行い、時にはさまざまな課題に直面し思い悩むことも多い。幼稚園・保育所・こども園などの保育現場においては、新任からベテランの保育者にいたるまですべての保育者がそれぞれの自己評価を行った上で、それをもとにしたカンファレンスや研修等を行う。保育者は日常的に行われるこの営みを積み重ね、協働する職員間で学びを共有することによって、お互いに問題点や課題を発見し改善する手立てを探る。このような方法で、保育者としての専門性や保育の質の向上につながるような明日のよりよい保育を目指しているのである。この「学びの共有」のためには、まずは「記録する」、つまり「書き留める」ことが不可欠である。人間の記憶は時間が経てば薄れるものであるが、記録したことは消えずに残っている。「評価」の基盤になるのが、この「記録」そのものであり「記録する」という行為である。

しかしながら、現代社会においては、この「記録する」、つまり「書く」という行為が苦手だと感じている人が多い。将来、保育者を目指している学生にも数多く見られ、それは本学子ども学科の学生についても例外ではない。スマートフォンを上手に操作し、他人とのコミュニケーションは一定程度取れる学生であっても、文章を書くことには抵抗感を持っている。実習において巡回指導をしている中でも、必ずと言っていいほど、実習先から「書けないこと」について厳しい指摘を受けているのが現状で

ある。これらのことに以前から危機感をもっていた筆者は、実習前の段階で学生が実際に「記録を取る」ことを経験し、その重要性を理解するための試みを数年に渡って継続的に行っている。

本論文では、保育現場における「記録」と「評価」の重要性について改めて明らかにするとともに、将来、教育者・保育者を目指す子ども学科学生に対する「観察記録・実践記録の取り方」指導の試みとその成果について報告し、考察することを目的とする。

## 2. 幼稚園・保育所・こども園における「記録」と「評価」

関ら（2008）は「幼稚園・保育園の先生のための保育記録のとり方・生かし方」<sup>1)</sup>において、「記録には短期のもの、長期のもの、また個人のもの、集団のものがあります。記録そのものも、メモ・日誌・ビデオなどさまざまです」としている。その上で、「どのような記録であっても、記録は子どもの大事な情報源です。保育者はこの情報を読みとり、整理することで、保育の指針を立て、援助の方向性を考えます。つまり、各園の指導計画の中で一人一人の子どもがいかにかき生かされるかは記録にかかわってくるわけです」と記録することの重要性について述べている。そうであるならば「子ども理解」という観点で、幼稚園・保育所・こども園では「記録」と「評価」についてどのように捉えられているのであろうか。

「幼稚園教育要領」<sup>2)</sup>第1章総則第4 指導計画の作成と幼児理解に基づいた評価の4 幼児理解に基づいた評価の実施において、次のように述べられている。

幼児一人一人の発達の理解に基づいた評価の実施に当たっては、次の事項に配慮するものとする。

(1) 指導の過程を振り返りながら幼児の理解を進め、幼児一人一人のよさや可能性などを把握し、指導の改善に生かすようにすること。その際、他の幼児との比較や一定の基準に対する達成度についての評定によって捉えるものではないことに留意すること。

(2) 評価の妥当性や信頼性が高められるよう創意工夫を行い、組織的かつ計画的な取組を推進するとともに、次年度又は小学校等にその内容が適切に引き継がれるようにすること。

「保育所保育指針」<sup>3)</sup>第1章総則3 保育の計画及び評価(4) 保育内容等の評価のア 保育士等の自己評価、イ 保育所の自己評価において、次のように述べられている。

ア 保育士等の自己評価

(ア) 保育士等は、保育の計画や保育の記録を通して、自らの保育実践を振り返り、自己評価することを通して、その専門性の向上や保育実践の改善に努めなければならない。

(イ) 保育士等による自己評価に当たっては、子どもの活動内容やその結果だけでなく、子どもの心の育ちや意欲、取り組む過程などにも十分配慮するよう留意すること。

(ウ) 保育士等は、自己評価における自らの保育実践の振り返りや職員相互の話し合い等を通じて、専門性の向上及び保育の質の向上のための課題を明確にするとともに、保育所全体の保育の内容に関する認識を深めること。

イ 保育所の自己評価

(ア) 保育所は、保育の質の向上を図るため、保育の計画の展開や保育士等の自己評価を踏まえ、当該保育所の保育の内容等について、自ら評価を行い、その結果を公表するよう努めなければならない。

(イ) 保育所が自己評価を行うに当たっては、地域の実情や保育所の実態に即して、適切に評価の観点や項目等を設定し、全職員による共通理解をもって取り組むよう留意すること。

(ウ) 設備運営基準第36条の趣旨を踏まえ、保育の内容等の評価に関し、保護者及び地域住民等の意見を聴くことが望ましいこと。

「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」<sup>4)</sup>第1章総則第2 教育及び保育の内容並びに子育ての支援等に関する全体的な計画等の2 指導計画の作成と園児の理解に基づいた評価(4)において、次のように述べられている。

(4) 園児の理解に基づいた評価の実施

園児一人一人の発達の理解に基づいた評価の実施に当たっては、次の事項に配慮するものとする。

ア 指導の過程を振り返りながら園児の理解を進め、園児一人一人のよさや可能性などを把握し、指導の改善に生かすようにすること。その際、他の園児との比較や一定の基準に対する達成度についての評価によって捉えるものではないことに留意すること。

イ 評価の妥当性や信頼性が高められるよう創意工夫を行い、組織的かつ計画的な取組を推進するとともに、次年度又は小学校等にその内容が適切に引き継がれるようにすること。

このように3法令すべてにおいて、それぞれの保育者や施設に対して「子ども理解」を目的とした「記録」を作成し、それに基づいて「評価」を行うことが求められている。また、この「評価」にあたっては以下のことが重視されていると考えられる。

1. 他の子どもの比較や一定の基準に対する達成度の評価ではなく、一人ひとりの子どもの育ちや発達段階に配慮した指導
2. 保育者の専門性や保育の質の向上に向けての課題の抽出と改善
3. 保育者を中心とした協働する全職員による情報の共有と、組織的で計画的な取り組み
4. 保幼小の連携と情報の共有
5. 家庭や地域との連携

以上を踏まえた上で、保育者の専門性や保育の質の向上のために保育者や各施設が取り組むべき「評価」のマネジメントサイクルを作成し、図1に示す。このサイクルにおける「教育課程」「保育課程」とは各施設の教育・保育の根幹であり、同時にそれぞれの施設がイメージする「育ってほしい子どもの姿」を表したものであろう。保育者はこれを基盤として具体的な指導計画を立案し、実際に保育を行う。実践した保育については自ら「記録」に収め、振り返りをしながら問題点や課題を抽出し、その改善方法を探る(自己評価)。さらに、その情報については保育者を中心とした協働する全職員、つまり施設

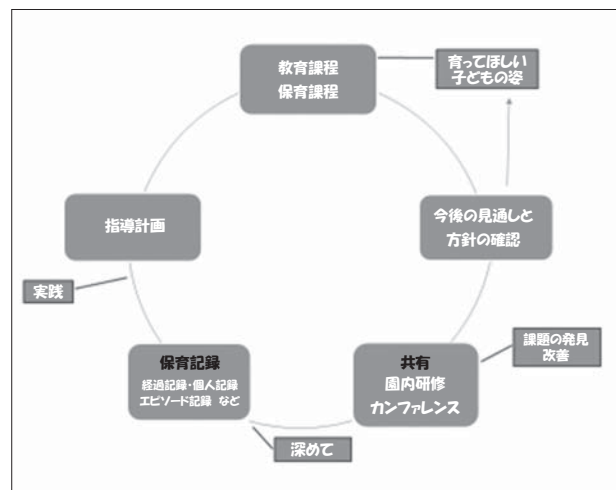


図1 「評価」のマネジメントサイクル(筆者作成)

内で研修やカンファレンス等の機会を利用して共有し、施設全体での「評価」に繋げていく必要があろう。それによって、保育内容の改善や充実が促され、今後の見通しを構築し方針を再確認することができるのである。このようなお互いの学び合いの結果、「育ってほしい子どもの姿」がより明確になり、さらに充実した「教育課程」「保育課程」へと進んでいくのではないだろうか。その意味では、保育における「記録」と「評価」は非常に重要なものであると言えよう。

### 3. 「記録を取ること」の重要性とその視点

はじめに、でも述べたように、保育者は日々の煩雑な保育業務の中で自らの保育について振り返りを行い、さまざまな課題に直面し思い悩むことも多い。具体的には以下のようなことが考えられる。

1. 子どもの生活や遊びの様子はどうか
  2. 活動を楽しむことができたか、また、そこからの学びについてはどうか
  3. 一人ひとりの姿はどうか
  4. 集団の様子はどうか
  5. 自分自身の子どもに対するかかわりや援助は適切であるか
  6. 設定したねらいや内容、環境構成は子どもにとってふさわしいものであるか
- など、一つひとつを挙げれば枚挙にいとまがない。

しかし、これらは大きく分けると2つの視点に分けられよう。1つ目は「子どもの育ち」の視点であり、2つ目は「保育者の保育のあり方」という視点ではないだろうか。「保育所保育指針解説」<sup>9)</sup>第1章総則3 保育の計画及び評価(3)指導計画の展開【記録と保育の内容の見直し、改善】において、「子どもは、日々の保育所の生活の中で、様々な活動を生み出し多様な経験をしている。こうした姿を記録することは、保育士等が自身の計画に基づいて実践したことを客観化することであり、記録という行為を通して、保育中には気付かなかったことや意識していなかったことに改めて気付くこともある」と、客観的な「記録」と「評価」の重要性に言及している。その上で、保育について記録をする際には、前述したように「子どもの育ち」と「保育者の保育のあり方」の2つの視点から行う必要があることを示唆している。関ら<sup>1)</sup>も「記録によって、子どもの育ちの方向性と適切な援助が生まれ、保育者自身の保

育に対する反省と評価が行われます」と述べており、記録においては子どもと保育者自身という2つの側面から見ていく必要があることを重視している。さらに、「これはまた、指導要録の作成と指導計画や教育課程の改善につながるもので、記録が保育といかに切り離せないかがわかるでしょう」と、記録することが保育者の明日への保育の出発点となり、将来的には小学校教育につながる礎となるとの見解を示している。

### 4. 「観察記録・実践記録の取り方」指導の試みと成果

#### 4-1. 取り組みの概要

##### (1) 対象学生

子ども学部子ども学科1年生92名

##### (2) 実施時期

平成29年12月

##### (3) 実施授業

保育内容総論

##### (4) 観察の対象

視聴覚教材 DVD「実践に学ぶ幼児の保育」

社会福祉法人 恩賜財団母子愛育会 日本子ども家庭総合研究所 監修

「第1巻 3歳を中心に」

「第2巻 4歳を中心に」

「第3巻 5歳を中心に」

観察の対象としたものは、それぞれが30分程度の保育の様子を撮影したビデオである。

##### (5) 記録方法

「保育の観察記録」から「保育の実践記録」へ

#### 4-2. 指導の具体的な流れ

平成30年2月に附属S幼稚園で1日間の「観察実習」、10月に2週間の「幼稚園教育実習Ⅰ」を行う予定の学生に対し、「観察記録・実践記録」を取るという経験をさせたものである。学生がこの経験をおして、「子ども理解」「保育者の子どもへのかかわりの姿」「子どもの活動に適した環境構成」とはどのようなものであるのかについて学ぶことを目的として、より具体的で実践的な試みになるよう計画している。実践の前に、授業の中でまず、保育における「記録」と「評価」の重要性、「記録を取る」ことの意義や「記録を取る」際の視点、書き方や手順を説明した上で実践へと進めていった。

観察記録用紙（ワーク）

学籍番号 \_\_\_\_\_ 氏 名 \_\_\_\_\_

時間	環境の構成	子どもの活動	保育者の援助・留意点

図 2 - 1 観察・実践記録用紙（表面）

時間	環境の構成	子どもの活動	保育者の援助・留意点
反省・感想・考察など			

図 2 - 2 観察・実践記録用紙（裏面）



4-1. (4)の観察の対象としては、学生の最初の実習先が幼稚園であることを考慮し、3歳児、4歳児、5歳児の各年齢の子どもの姿が詳細に描かれているDVD教材を導入することによって、より保育現場に近い状況を作った。

(5)の記録方法については、最初の段階では、第三者の誰が読んでもその状況が理解できるように、状況や活動の事実をありのままに客観的に記録する「観察記録」の方法で行った。次に記録することに少し慣れた段階では客観性を担保しながらも、そこに記録者自身の感じたことや考えたことを加えるという「実践記録」の方法に移行していった。その具体的な方法としては、授業の1週ごとに3歳児、4歳児、5歳児という順にビデオを見せ、まずはメモを取り、1週間かけて記録用紙(図2-1.2)にまとめることを次の週までの課題とした。1週間後に持参した記録については、次のことを行った上で提出させた。

3歳児の記録：同じビデオの記録の見本を配布し、特に、「子どもの活動」「保育者の援助・留意点」「環

境の構成」欄に記録する際のポイントや留意点について詳細を説明した。学生はそれを参考にしながら、自分自身の記録を見直し、不足する箇所や修正する箇所に朱書きし提出した。(図3)(図4)

4歳児の記録：第三者が読んでもその活動内容や状況が理解できるという、記録に求められる客観性を意識しながらも、その状況の子どもや保育者の思いにまで深めながら「実践記録」を取ることに進んでいった。自分が書いた記録を他の学生と交換してお互いに評価し合う中で、不足する箇所や修正する箇所には朱書きしてもらい、返却されたものを再度見直し修正して提出した。(図5)(図6)(図7)(図8)

5歳児の記録：さまざまな修正をして完成させた3歳児、4歳児の記録をもとにして、学んだ点や反省点を生かした記録に仕上げ提出した。この時期には、自らが保育者になったつもりでできるだけ具体的・詳細な記録を取ることを目標とした。

この取り組みは、まだ実際に子どもとのかかわる経験をしていない段階の学生にとっては少し難しいと



図3 修正の様子(3歳児)



図5 修正の様子(4歳児)



図4 記録の修正(3歳児)



図6 記録の修正(4歳児)①

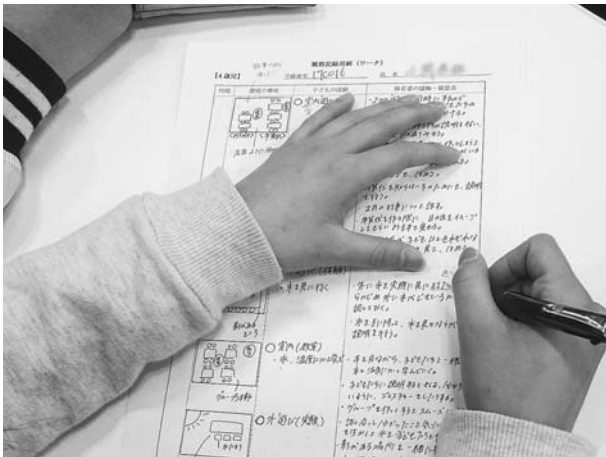


図7 記録の修正（4歳児）②

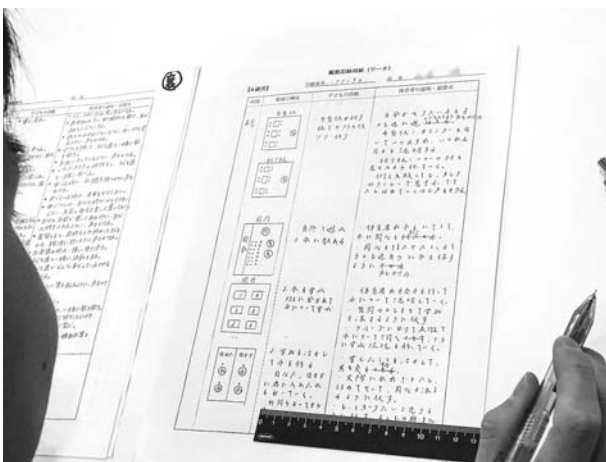


図8 記録の修正（4歳児）③

ころがあったものの、経験を重ねるうちに、次第に「何故この子はこのような態度をとったのだろうか」「この時の子どもの気持ちはどうだったのだろうか」というように、活動から見えてくる子どもの心の内面を考えながら記録を取る姿が見られた。また保育者のかかわりについても、初めのうちは、ただ言葉かけや対応そのものを捉えた記録であったものが、その言葉かけや援助にどのような意図が含まれているかという点を考えながら留意点や配慮点を加えて書けるようになり、観察の視点や記録するポイントが明確になり、少しずつ成長が見られるようになった。

#### 4-3. 「観察記録」「実践記録」の実例と成果

図9～図14は2人の学生（学生A）（学生B）の3，4，5歳児の記録の実例である。なお、どちらも同じ条件下で記録を取っている。太線で囲んでいる箇所は、修正箇所であり、実際には朱筆になっている部分である。

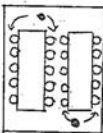
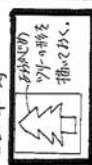
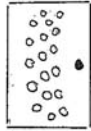
#### ①学生Aの記録（図9～11）

図9は3歳児の記録であるが、全体的に抽象的な表現が目立つ。特に「環境の構成」の欄からは最初、保育者と子どもの位置関係や準備物しか読み取ることができず、本人もあとから保育室や運動場の環境図を図示し加えている。「子どもの活動」の欄や「保育者の援助・留意点」の欄についても、映像から読み取れる範囲で、ありのままの状態が忠実に記載されている。図10は4歳児の記録である。3歳児の記録を踏まえ、「環境の構成」については、具体的に図示するなど工夫していることがうかがえる。「子どもの活動」の欄については、活動の流れを羅列するのではなく、その時の子どもの状況が見える形での記載になっている。「保育者の援助・留意点」の欄については、単なる「援助する」という表現ではなく、子どもが今置かれている状態を踏まえてどのような援助が行われていたかに視点を置き、「子どもが～できるように援助する、言葉かけする」などの表現が見られるようになった。図11は5歳児の記録である。どの欄を見ても具体的・詳細な記録となり、事実の記載に終わることなく、その行動や言葉の中にある子どもの思いや、保育者の対応の意図をくみ取って記録を取ることができるように変化している。下線（筆者加筆）については、子ども同士でトラブルが起きた時などに、対応する保育者の配慮について記録された部分である。初期のころの記録と比較すると、子どもの葛藤に寄り添う保育者の姿から具体的な保育者の意図を読み取り、それを記録に明確に反映することができるようになった。これは、この学生の大きな成長と考えてよいのではないだろうか。

#### ②学生Bの記録（図12～14）

この学生の記録については、取り組みの最初の段階から非常に記録の視点が明確であり、第三者が読んだときにその状況がわかりやすいものになっている。「環境の構成」、「子どもの活動」、「保育者の援助・留意点」などすべてにおいて、具体的かつ詳細な表現が用いられており、記録から子どもや保育者の思いが伝わってくる。4歳児の記録以降は、自分自身が保育者になったつもりで、その立場からの記載になっているのが特徴的である。「反省・感想・考察」の欄には、映像を観ているのではなく、あたかも子どもと一緒に活動しているようリアル感があり、それぞれの場面において気づいたことや反省



時間	環境の構成	子どもの活動	保育者の援助・留意点
	 <p>画用紙、人数分の具、フロン色鉛筆等</p> 	<p>・表現活動 ・クリスマスツリーの絵を描く</p> <p>・昼食、片付け *はいを上手に使える *自分の使った食器を片付ける。</p> <p>・午睡 *自分でパジャマに着替え、脱いだ着服をたたむ</p> <p>・自由遊び(室内) *F君とF君で作っていたが、数名がかわり、皆で協力してつものを完成させる</p> <p>・午後食(おやつ)</p> <p>・帰りの会 *皆で歌を歌り</p>	<p>・画用紙にツリーの絵を前もって描いておく</p> <p>・色をはみ出さず塗れるよう援助する</p> <p>・はいを上手に使えるよう援助する</p> <p>・子どもとのコミュニケーションを大切にすること</p> <p>・食事のマナーが身に付くよう援助する</p> <p>・片付けがスムーズにできるよりに援助する</p> <p>・着替えの援助力をする</p> <p>・脱いだ洋服をきれいにたためるように援助する</p> <p>・協力して完成で"きる"ように脱ぐ</p> <p>・健康面・栄養面を考える</p> <p>・楽器などを活用し、子どもの感性が豊かになるよう工夫する</p>
		<p>・積み木せわし等</p>	

反省・感想・考察など

図9 学生Aの記録(3歳児)

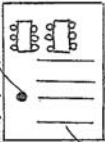

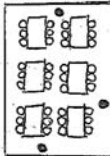
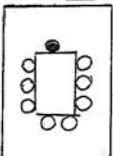


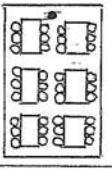
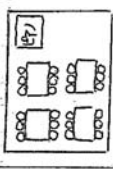

観察記録用紙 (ワーク)

学童番号

氏 名

【4 歳児】

時間	環境の構成	子どもの活動	保育者の援助・留意点
	<p>＜保育室＞ 保育者</p>  <p>遠慮</p>  <p>年賀状作り</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>年賀状に色紙をちぎって貼る。</li> </ul> <p>余白に新年の挨拶をひらがなで書く。</p> <p>折り紙を折る。</p>  <p>自然の現象に触れる活動</p>  <p>温度について考える</p> <p>グループに分かれて図鑑や絵本で冬の現象について調べる。</p> <p>図鑑にのっていることと実践のため、プラスチックの入れ物などに氷や色水を入れて外に置く。</p>	<p>○年賀状作り</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>年賀状に色紙をちぎって貼る。</li> </ul> <p>余白に新年の挨拶をひらがなで書く。</p> <p>折り紙を折る。</p> <p>自然の現象に触れる活動</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>温度について考える</li> <li>グループに分かれて図鑑や絵本で冬の現象について調べる。</li> <li>図鑑にのっていることと実践のため、プラスチックの入れ物などに氷や色水を入れて外に置く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>期限の日程をカレンダーで示しながら伝える。</li> <li>完成している手本を示す。</li> <li>子どもたちがイメージしやすいように絵本などの視覚的材料を用意する。</li> <li>色紙を細かくちぎると良いということを伝える。</li> <li>手についたのりをふくためのタオルを用意しておく。</li> <li>ひらがなを上手く書けない子どもを援助する。</li> <li>折り紙の折り方の手順を書いた手本を準備する。</li> <li>子どもと一緒に折りながら、途中の過程を示しながら丁寧に説明する。</li> <li>できているか、1人ひとり観察しながら説明の速度を調整する。</li> <li>氷の特性を考えるように促す。</li> <li>温度について野外活動での経験をもとに説明する。</li> <li>保育室の外と内での温度変化の違いを直接体感するように促す。</li> <li>プラスチックなどの容器を用意する。</li> <li>影に置く方がより固まりやすいことを伝える。</li> </ul>

時間	環境の構成	子どもの活動	保育者の援助・留意点
	  	<p>着替え ・戻った衣服をもどし、きれいにたたむ</p> <p>昼食 ・手洗いをする ・挨拶をし、食べる</p> <p>園外での遊び ・山(森)での遊び</p>	<p>自分でできない部分を少しだけ援助する。</p> <p>・ピアノを弾いて、楽しい雰囲気の中で食事ができるように工夫する</p> <p>・子ども達とのコミュニケーションを大切にすること。</p> <p>・斜面を転がるときのように軽く背中を押して援助する。</p> <p>・保育者も子どもと一緒に斜面を転がり、子どもとの距離を縮める</p> <p>・子どもの安全面を第一に考える。</p>
	反省・感想・考察など		

ここも書きましょう。

図10 学生Aの記録 (4 歳児)

[illegible]

— 30 —



☒

☒

図12 学生Bの記録(3歳児)



観察記録用紙 (ワーク)

学級番号 \_\_\_\_\_ 氏名 \_\_\_\_\_

【4 歳児】

時間	環境の構成	子どもの活動	保育者の援助・留意点
09:00 - 10:00	<p>&lt;制作&gt; 平賀川(下)川作り紙遊び (先生の手)</p> <p>(活動時)</p> <p>先生の手</p> <p>平賀川(下)川作り紙遊び</p> <p>(活動時)</p> <p>先生の手</p> <p>平賀川(下)川作り紙遊び</p>	<p>先生の説明に耳を傾け、自分の平賀川(下)川作り紙遊びを始める。</p> <p>(平賀川(下)川作り紙遊び)</p> <p>先生の説明に耳を傾け、自分の平賀川(下)川作り紙遊びを始める。</p> <p>(平賀川(下)川作り紙遊び)</p> <p>先生の説明に耳を傾け、自分の平賀川(下)川作り紙遊びを始める。</p> <p>(平賀川(下)川作り紙遊び)</p>	<p>保育者の援助・留意点</p> <p>先生の説明に耳を傾け、自分の平賀川(下)川作り紙遊びを始める。</p> <p>(平賀川(下)川作り紙遊び)</p> <p>先生の説明に耳を傾け、自分の平賀川(下)川作り紙遊びを始める。</p> <p>(平賀川(下)川作り紙遊び)</p>
10:00 - 11:00	<p>&lt;制作&gt; 平賀川(下)川作り紙遊び (先生の手)</p> <p>(活動時)</p> <p>先生の手</p> <p>平賀川(下)川作り紙遊び</p> <p>(活動時)</p> <p>先生の手</p> <p>平賀川(下)川作り紙遊び</p>	<p>先生の説明に耳を傾け、自分の平賀川(下)川作り紙遊びを始める。</p> <p>(平賀川(下)川作り紙遊び)</p> <p>先生の説明に耳を傾け、自分の平賀川(下)川作り紙遊びを始める。</p> <p>(平賀川(下)川作り紙遊び)</p> <p>先生の説明に耳を傾け、自分の平賀川(下)川作り紙遊びを始める。</p> <p>(平賀川(下)川作り紙遊び)</p>	<p>保育者の援助・留意点</p> <p>先生の説明に耳を傾け、自分の平賀川(下)川作り紙遊びを始める。</p> <p>(平賀川(下)川作り紙遊び)</p> <p>先生の説明に耳を傾け、自分の平賀川(下)川作り紙遊びを始める。</p> <p>(平賀川(下)川作り紙遊び)</p>

図 13 学生 B の記録 (4 歳児)

時間	環境の構成	子どもの活動	保育者の援助・留意点
10:00 - 11:00	<p>&lt;制作&gt; 平賀川(下)川作り紙遊び (先生の手)</p> <p>(活動時)</p> <p>先生の手</p> <p>平賀川(下)川作り紙遊び</p> <p>(活動時)</p> <p>先生の手</p> <p>平賀川(下)川作り紙遊び</p>	<p>先生の説明に耳を傾け、自分の平賀川(下)川作り紙遊びを始める。</p> <p>(平賀川(下)川作り紙遊び)</p> <p>先生の説明に耳を傾け、自分の平賀川(下)川作り紙遊びを始める。</p> <p>(平賀川(下)川作り紙遊び)</p> <p>先生の説明に耳を傾け、自分の平賀川(下)川作り紙遊びを始める。</p> <p>(平賀川(下)川作り紙遊び)</p>	<p>保育者の援助・留意点</p> <p>先生の説明に耳を傾け、自分の平賀川(下)川作り紙遊びを始める。</p> <p>(平賀川(下)川作り紙遊び)</p> <p>先生の説明に耳を傾け、自分の平賀川(下)川作り紙遊びを始める。</p> <p>(平賀川(下)川作り紙遊び)</p>
11:00 - 12:00	<p>&lt;制作&gt; 平賀川(下)川作り紙遊び (先生の手)</p> <p>(活動時)</p> <p>先生の手</p> <p>平賀川(下)川作り紙遊び</p> <p>(活動時)</p> <p>先生の手</p> <p>平賀川(下)川作り紙遊び</p>	<p>先生の説明に耳を傾け、自分の平賀川(下)川作り紙遊びを始める。</p> <p>(平賀川(下)川作り紙遊び)</p> <p>先生の説明に耳を傾け、自分の平賀川(下)川作り紙遊びを始める。</p> <p>(平賀川(下)川作り紙遊び)</p> <p>先生の説明に耳を傾け、自分の平賀川(下)川作り紙遊びを始める。</p> <p>(平賀川(下)川作り紙遊び)</p>	<p>保育者の援助・留意点</p> <p>先生の説明に耳を傾け、自分の平賀川(下)川作り紙遊びを始める。</p> <p>(平賀川(下)川作り紙遊び)</p> <p>先生の説明に耳を傾け、自分の平賀川(下)川作り紙遊びを始める。</p> <p>(平賀川(下)川作り紙遊び)</p>

氏名

【5歳児】

[illegible]

図14 学生Bの記録(5歳児)

[illegible]



点、考察などが書かれている。今後は実習を体験することによって、子どもと実際にかかわりながら、映像ではなくその状況を自分の目で観察することができるようになることから、さらなる成長が予想され期待される場所である。

## 5. おわりに

「観察記録・実践記録の取り方」指導の試みにおいて、ほとんどの学生の記録には段階的な変化が見られた。しかしながら、その変化には個人差があり、3回の記録がほぼ足踏み状態の学生もいる。そのような学生に対しては修正を行っている時に教室を巡回し、具体的なアドバイス等も行ったが、なかなか改善されなかった。はじめに、述べたように、現代社会においては「書く」という行為そのものが苦手であると感じている学生も数多くいるのが現状である。スマートフォンなども急速に普及し、普段の生活においては「書く」ことをしなくても特に困るということがない。ただ、将来は子どもにかかわる職業を目指す学生たちであり、教育職・保育職に就けば、「書く」「記録する」行為は必ず伴うものである。そう考えると、学生にとってこの「書くこと」「記録すること」については得意・不得意にかかわらず、一定のレベルまで達することが求められよう。

また、今回のワークについては、映像の中の子どもの姿や保育者のかかわりの姿を記録するというものであった。しかしながら現実はそのようではない。観察する対象は映像の向こう側にいるのではなく、すぐそばにいたのである。保育者は実際に子どもの中に入ってかかわりながら、その表情や言葉、心の奥にある気持ちなど、気づいたことを記録としてまとめていくのである。これはさらに高度な課題となるであろう。

## 6. 今後の課題

今回「観察記録・実践記録の取り方」指導の試みと成果について、学生の書いた実際の記録をもとにその変化や成果を検討することができた。今後は、この指導における学生自身の学びの評価について検証したいと考えている。そのうえで、実際に「幼稚園教育実習Ⅰ」に進んだ学生たちが、実際の保育現場で記録を取るによって学んだことは何かについて、学生の側からのアンケート調査結果を分析し、

段階を追った成果の検証を進めていきたい。

また記録の形式として、今回は時系列に活動の流れをとらえて記述する方法で行ったが、今後は個人記録やエピソード記録を経験させ、「子ども理解」をさらに深めることができるよう働きかけていきたいと考える。

## 引用文献

- 1) 関章信他(2008)「幼稚園・保育園の先生のための保育記録のとり方・生かし方」 鈴木出版 p15
- 2) 幼稚園教育要領(2018)「平成29年告示 幼稚園教育要領〈原本〉」 文部科学省 チャイルド本社 p12
- 3) 保育所保育指針(2018)「平成29年告示 保育所保育指針〈原本〉」 厚生労働省 チャイルド本社 p31
- 4) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領(2018)「平成29年告示幼保連携型認定こども園教育・保育要領〈原本〉」 内閣府・文部科学省・厚生労働省 pp69-70
- 5) 保育所保育指針解説(2018) 厚生労働省編 フレーベル館 p52

## 参考文献

- ・室田一樹(2016)「保育の場で子どもを理解すること—エピソード記述から“しる”と“わかる”を考える—」 ミネルヴァ書房 pp5-7

## 授業における使用視聴覚教材

- ・視聴覚教材 DVD「実践に学ぶ幼児の保育」  
社会福祉法人 恩賜財団母子愛育会 日本子ども家庭総合研究所 監修  
「第1巻 3歳を中心に」  
「第2巻 4歳を中心に」  
「第3巻 5歳を中心に」